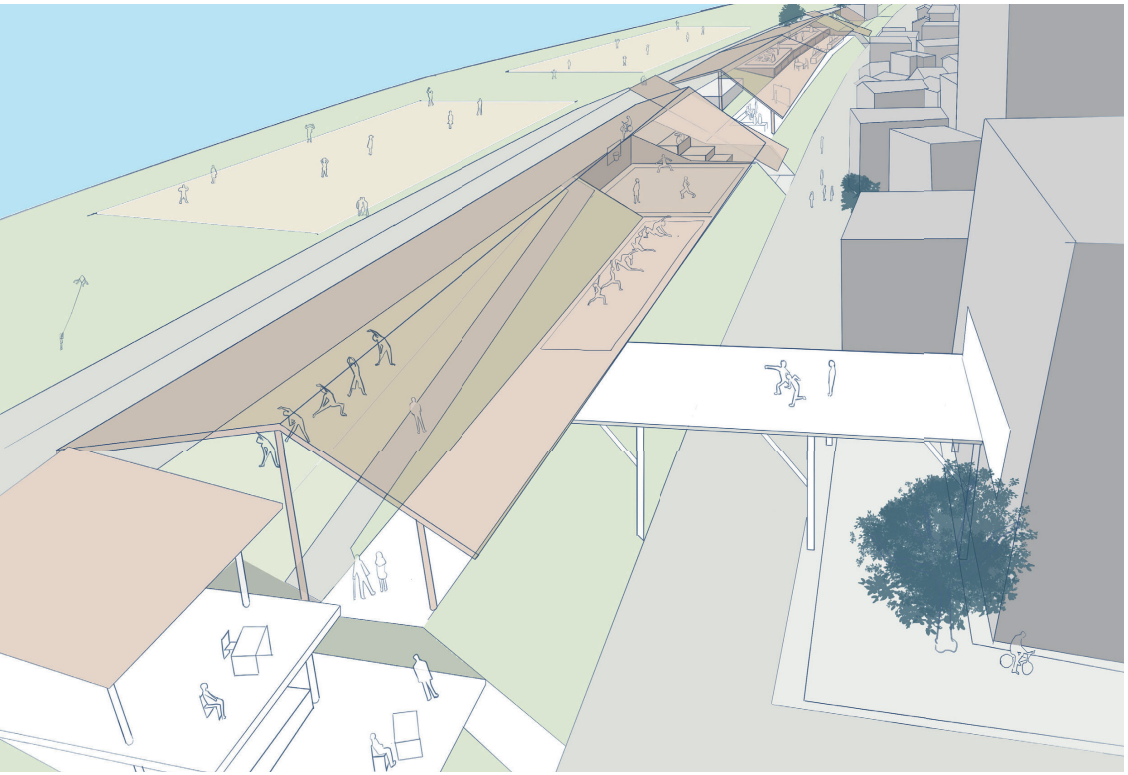


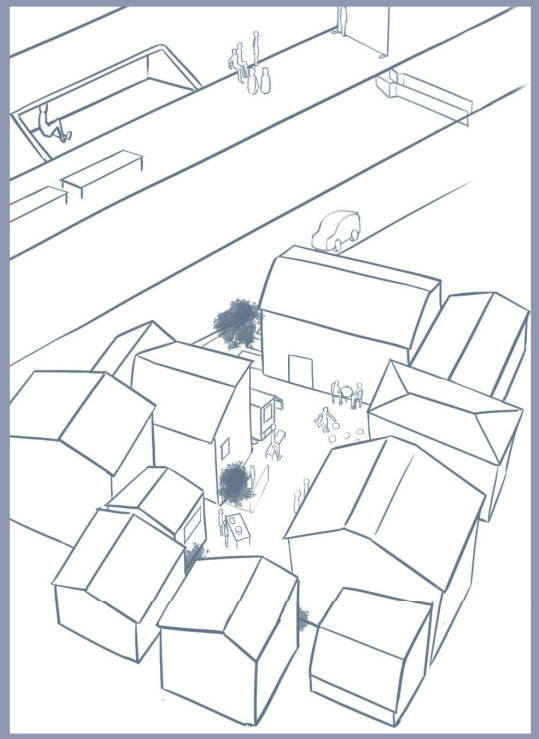
土木で出来た形に居場所を見出す

どんな一日であろうと　体の置き場を作る

近代の土木事業と車中心の道が街中に広がる事で、街区で共有されていた地面が人の居場所ではなくなった。

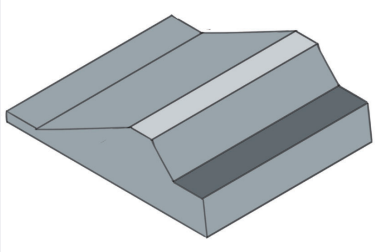
この変化によって、近所の人が立ち話できる袋小路や、独りになりたい時訪れる空き地の陽だまりが奪われた。しかし実際に近代土木と街が衝突する部分を訪れると、堤防の下から堤防上へ上ることで街の内部にはない開放感を得られたり、朝の日光を堤防の上で浴びて家に戻ったりと、堤防上の空間と街中の小さな空間の 2 つの場所を使いこなす楽しさがあると感じた。

車や敷地といった制度的なもので計画された街から開放されて、街と堤防とを自由に行き来する居場所があることで、どんな 1 日であっても体を使って過ごせる街になるのではないかと考えた。

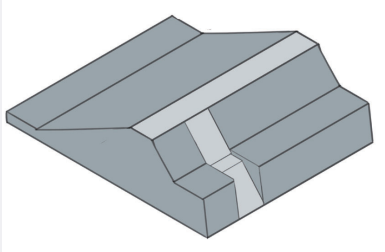


土木事業や高架などの建造物は街の景色に大きな影響を与えてきた。中でも町の景観に大きな影響を与えてきた堤防は台風 19 号の大雨により多摩川が氾濫したことを契機として、存在意義を問われている。

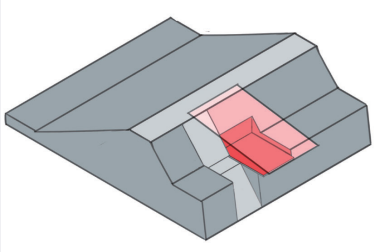
防災のための物から、身体感覚をよりどころとして町の人が寄り集まる為の居場所として人と土木の関係を考えられないかを考えた。



車のための道、
防災のための盛り土



人が堤防へ直接
アクセスする

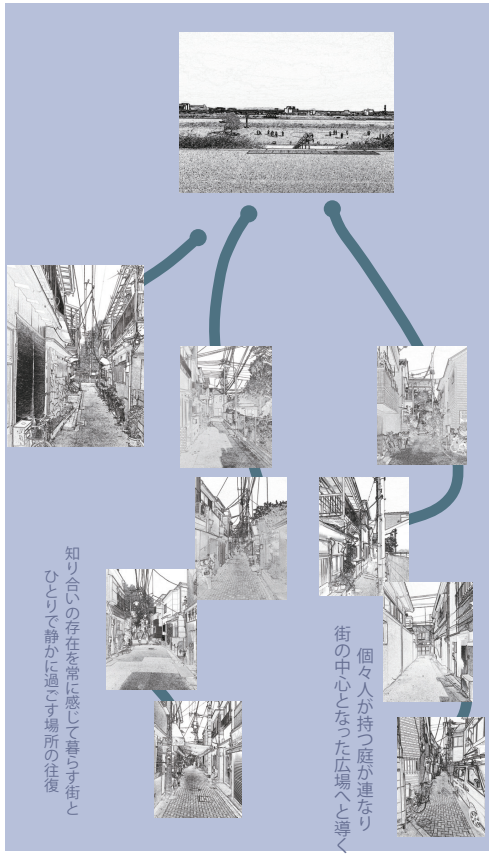


堤防という空間が
共同体の軸になる

敷地　足立区柳原町の堤防

街から堤防への歩行経験

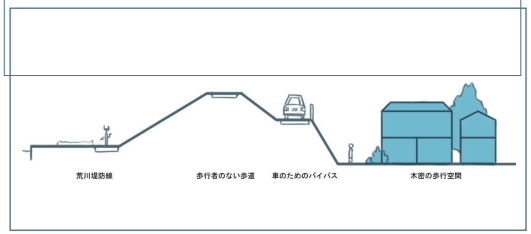
この町は車通りが少なく歩行に適した構造をしており、町の中から堤防を登っていくことで町の人々は木密の中にはない風通しと日当たりがある見通しの良い空間へと出る。コントラストに富んだ歩行経験を活かし、堤防の空間を軸にした町の構造体を作ることが提案の目的である。

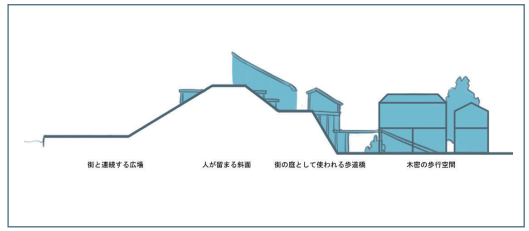


堤防と街を往復する生き方

街の広場として堤防が開かれることで、日当たり、風通し、賑わい等の身体感覚をもとにして自由に町全体を使いこなす暮らしが可能になる。

堤防と街の繋ぎ方



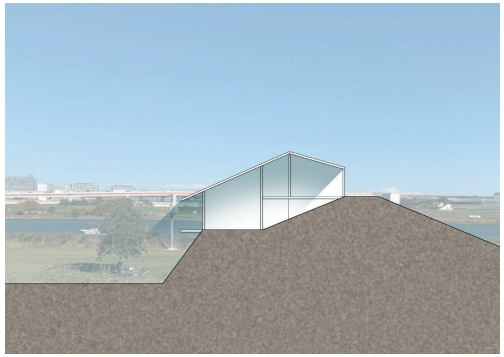


敷地　足立区柳原町の堤防

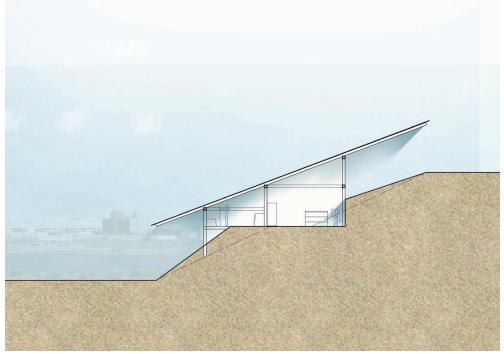
荒川放水路によって切断された地域が敷地である。荒川放水路の開削事業が木造住宅の密集する地域を横断し、街の中に建物ほどの高さの堤防が現れた。

街には昔ながらの商店街や大規模な祭りを行う神社等身体スケールに近い空間が残されており、その外側にはレベル差によって分断された堤防上の空間が街を見下ろせる形で連なっている。近代土木がもたらした風、光を街に開きたい。

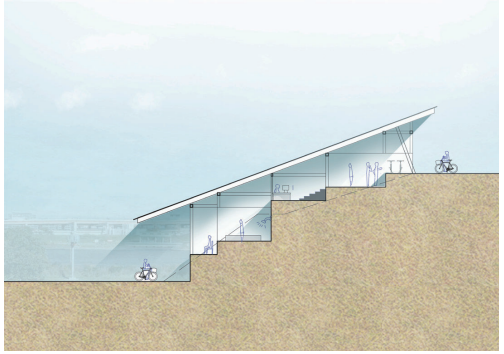
A: 堤防斜面と大屋根下の空間

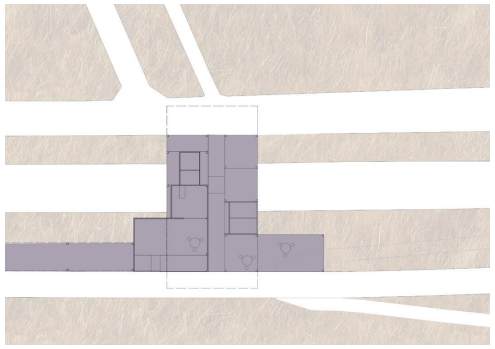


B: 地面の窪みと屋根の隙間

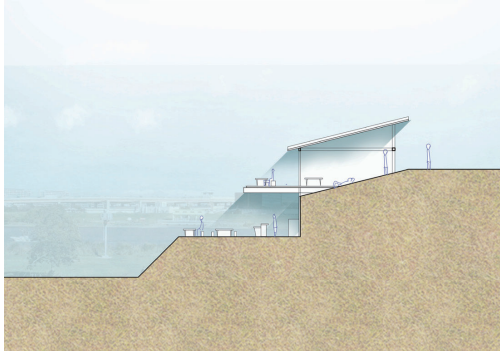


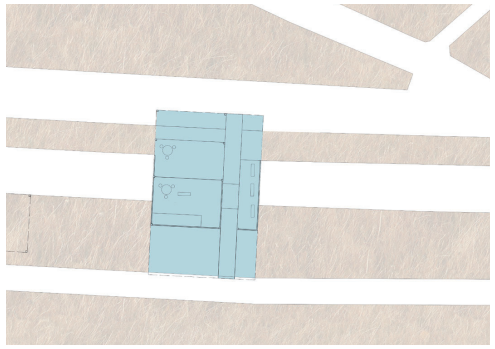
C: 階段状に連なるテラス





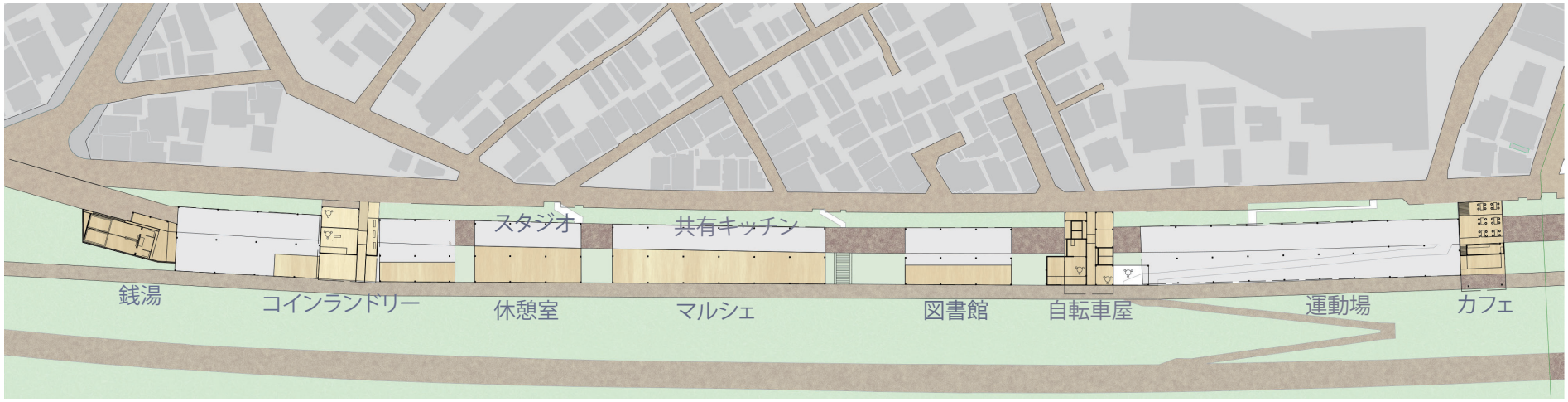
D:2 段のテラスとその間



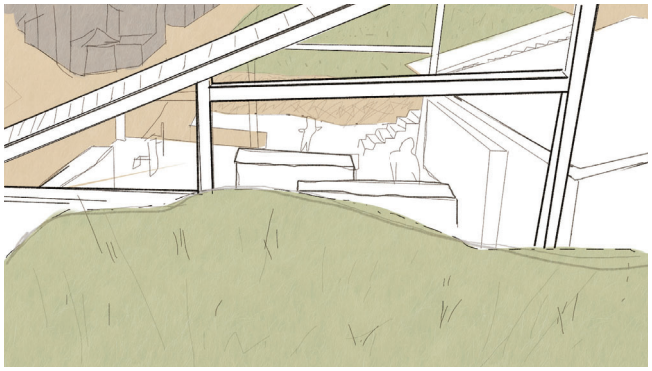
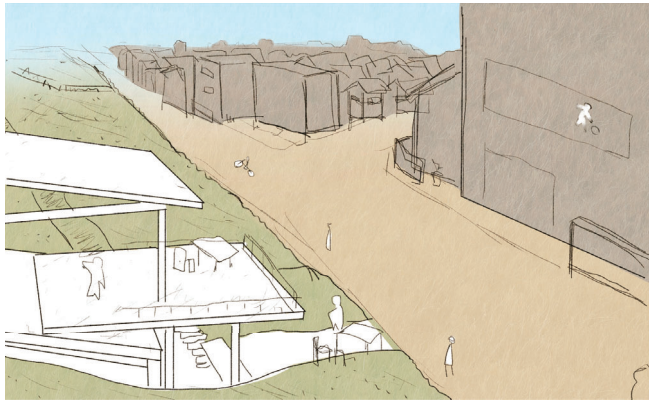
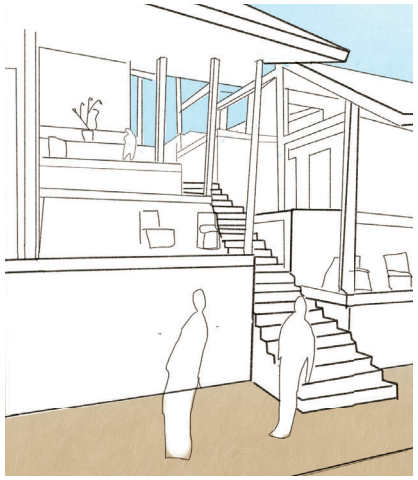
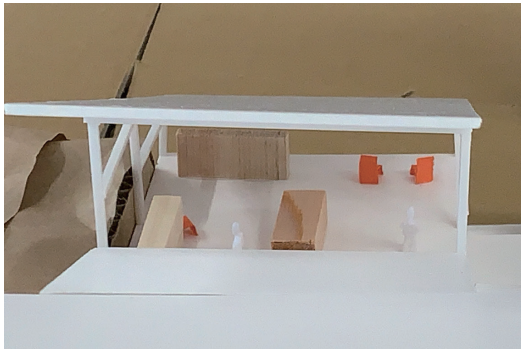


平面配置図
S=1/12000

動線空間から堤防上の人が行き来する道に沿った屋根を掛けることによって、4 つの動線建築のそれぞれが堤防全体とつながり、堤防上の広場にコントラストを与える。
もともと不必要なバイパスが通っていた堤防中段の道は、町の住民がイベントに用いる広場や裏庭として日常的に使われる居場所となる。



堤防に作られたくぼみや屋根の空間が客席やたまり場になる事で、学校や使い道のない空き地、神輿が通る祭りの道が堤防を通して一つの風景となる。

堤防が町の広場として共有されることで、堤防が町の財産となるだけでなく、堤防を引き継ぐことで災害に対する意識を町全体にもたらし、町と堤防を守るための共同体を作る。

広場がもたらした居場所のあり方を通じて、町の人が街中においてもその身体感覚によってそれぞれのコモンズのあり方を再発見する為の学びを得る。